論 文 内 容 の 要 旨

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人文学プログラム
２０１８年度入学
（学生番号）１８１７０００１２６

丹治正弘（たんじ まさひろ）

１．論文題目
　日蓮の世界認識の方法

２．論文要旨

　戦後の日蓮研究は、むろんその研究領域について截然と区分しうるわけではないものの、総じて日本史学・日本思想史学研究と、教義・教団史研究に大別しうる。前者における主な論点には、「国家と宗教」のテーマに関連しての仏法為本論、王仏冥合（法国冥合）論、国王・国主観、体制観があり、また神祇観、世界観、対外観のほか、著作の真偽問題がある。後者における争点では、やはり著作の真偽問題が大きなウエイトを占めているほか、天台本覚思想の影響の有無、布教手段をめぐる摂折論などがあり、さらに教化伝道に関連するテーマとして、日蓮による軍記、説話、類書等の受容の問題がある。本論ではそれらの論点のうち、これまで必ずしも十全に明らかにされているとはいえない問題について検討し、日蓮研究のさらなる可能性を探った。

　まず第一章「日蓮の世界観の転換―三国世界観を乗りこえて―」では、日蓮が畢生の宗教的回心を果たしたとされる、「文永八年の法難」の問題を取り上げ、従来は主に、同「法難」における佐渡流罪以前（佐前）・流罪以後（佐後）を画期とする教義面での変化に関心が集中してきたものの、日蓮の思想的営為にとっての最大の意義の一つとは、むしろその世界観が転換したところに求められることを論じた。それというのも佐前の日蓮は同時代の他の宗教者と同様に、いわゆる三国世界観、すなわちこの世界はインド・中国・日本の三国で構成されるとする日本独特の世界観を受容していたが、それが佐後になると、世界、全世界を意味する仏教用語である「一閻浮提」という言葉を、三国の語と置き換えるかたちで多用するようになる。つまり佐後の日蓮は、三国世界観の示す地理的・空

間的認識の限界について再考し、三国よりも広義の用語を主体的・意識的に用いはじめたのであって、そのことによって従来の三国世界観を超克し、一閻浮提世界観ともいうべき認識に到達したと考えられるからである。その背景には日蓮の宗教的回心という宗教上の要件だけではなく、一三世紀における対外的交流や蒙古襲来の危機に伴う地理的関心と知見の拡大、日本国内における交通の発達、国土の数量的把握などの現実的な諸要件が存在したと考えられる。

続く第一章・補論「日蓮「一天四海」の用法と変容」では、第一章で挙げた一閻浮提、および「一閻浮提広宣流布」という語に関連して、現在ではむしろ「一天四海」および「一天四海皆帰妙法」という用語のほうが日蓮を象徴する言葉として広く使用されている点に注目し、これらの語が実際には日蓮著作に存在しないこと、確かに日蓮が「一天」と「四海」を単独で使用した例はあるものの、それらはいずれも日本一国を意味しており、一閻浮提の語のように世界を意味する言葉ではないことを指摘した。また、いつ、なぜ後者が前者に置き換わるにいたったのかについては史料的制約から明らかではないものの、その時期はおよそ一六世紀後半以降と推定されることを述べた。

次に戦後の史学・思想史学分野における日蓮理解の一つである、その特異な正統意識を取り上げた第二章「日蓮の正統意識について」では、日蓮の正統意識の内実とは、自説の優越意識ばかりではなく、それを唱導した日蓮自身に対する体制および社会の随順を強く要求するものであったことを指摘し、むしろ社会における自説と自身の正統化という意味での社会化を目指したところにその特徴が認められるところから、注目するべきは日蓮の内的次元における正統意識だけではなく、社会的次元における日蓮の正統性の訴求方法であるとした。そして、そこで手がかりとなるのはその対外認識であって、日蓮は第一章で見たように日本の上位に一閻浮提という高次・広域の概念を設定したが、そこで自説を宣布することによって、それよりも下位に位置する日本における正統性をも獲得し、日本の体制・社会への訴求をはかっていたことを論じた。

第三章「一閻浮提・月氏・半島　―日蓮の体制相対化をめぐって―」では、同じく戦後の日蓮研究の成果であるところの、佐後の日蓮における体制相対化に関連して、その理論的基盤である釈尊御領観に目を向けた。これは釈尊→梵天・帝釈など普遍的善神→日本神祇→日本の統治者という統属的擬制を設定し、日本の為政者を仏教的価値体系の中に位置づけることで体制の相対化をはかるものであるが、佐後の日蓮著作を見るとその体制相対化の背景には、かかる仏教由来の要素だけではなく、現実の国土の物理的大小によって日本と日本以外の地域を比較・対照し、もって日本を相対化するという視座が認められること、そのような地理的空間の実体的把握の表れとして佐後の日蓮は、現在のインドを意味する天竺の語の使用を意図的に回避し、代わって今日のアジア全域を意味する言葉として「月氏」の語を採用していたことを指摘した。さらに三国世界観のもとで長く捨象されていた韓・朝鮮半島についても再認識し、半島を仏教伝来の歴史における日本の上位の存在として位置づけることで、重ねて日本の相対化

をはかっていたとした。

以上の世界観、正統意識、体制相対化に加えて、日蓮を語るさいにしばしば言及されながら、その内実がよく把握されていないテーマとして日蓮の対外意識が挙げられる。そこで第四章「日蓮の対外意識と仏教西還説」では、佐前・佐後の関連著作を比較・対照すると、佐前は中世日本で一般的に受容されていた仏教東漸説（インド→中国→日本への仏教伝来）を受容していたものが、佐後は仏教西還説（日本仏教による半島→中国→インドへの還流）に転換した点を指摘。元来、この西還説は日蓮の創見とされてきたが、関連著作を時系列でたどると、もともとは東漸説を母体とし、そこから派生したこと、また日蓮は西還説を構想するにあたって仏典の内容を改変していることから、日蓮にとっての仏教西還説とは、それほどまでに重要な概念であったこと、またこれらのことから日蓮の対外意識の内実とは、第一義的には自説の海外展開にあったことを確認した。

このほか戦後の日蓮研究の成果には、日蓮が仏典のみならず、中国の史書や日本の軍記・説話等から多くを受容していたという事実の解明がある。そのうち軍記・説話に関しては、主に信徒教化のための伝道文書に利用されたものと理解されてきたが、日蓮にとっての軍記・説話とは単なる教化激励用の素材の域にとどまるものではなく、日蓮の思想的営為を支える上で重要なリソースであった。その端的な例が、日蓮の最も親炙した『宝物集』である。この点に注目した第五章「日蓮と『宝物集』」では、両者の間には従来、指摘されてきた件数の約二倍にも及ぶ関連箇所を指摘しうること、日蓮は佐後のキーワードである一閻浮提という言葉を、仏典からではなく、『宝物集』から得ていたと推認できることなどから、日蓮がその思想形成において軍記・説話を内在化し、大きく依拠していたことを論じた。

こうした軍記・説話の積極的受容は、『宝物集』などのように今日、日蓮著作での引用が直接に確認される作品ばかりではなく、日蓮直弟の著作からも確認しうる。この点について第五章・補論「日法『聖人之御法門聴聞分集』に見る後白河院説話について」では、直弟の一人・日法による日蓮の講義録と考えられている『聖人之御法門聴聞分集』を取り上げ、同書には日蓮の著作からは確認しえない後白河院の熊野参詣にまつわる説話が含まれていることから、日蓮が著作に利用した説話以外にも豊富な知識を持ち、それを門弟にも教材として講説していたことを指摘した。

第五章、および同補論と同じく、日蓮の軍記・説話の内在化について端的に物語る事例が、「文永八年の法難」のハイライトであるところの、龍口刑場における霊験譚である。第六章「日蓮の龍口霊験譚について」では、日蓮が龍口で斬首されようとしたさいに突如として「光物」なるものが現れたために危難を逃れたという霊験譚が、長門本『平家物語』の収める平盛久の観音利生譚と極めて近似しており、戦後の研究によって日蓮が『平家物語』諸本成立の前段階に位置し、当時は「平家」と称されていたと想定される説話群を受容していたことが明らかになっている今日においては、日蓮自身が畢生の宗教的体験を自ら描写ないし

再構成するにあたっても同時代の説話に範を取っていたと想定されることを述べた。

以上、本論において日蓮の世界観、正統意識、体制相対化、対外意識の内実、文化的成果の受容の意義などの問題を検討した上での結論を総括的に述べるならば、日蓮が当時の日本の社会と体制、宗教と文化、総じて人間および人間を取り巻く一切の事象としての世界を認識する上での方法とは、こんにち日蓮について一般的に了解されているような、宗教に由来する要素ばかりではなく、地理的・空間的認識、対外的関係、文化的環境をはじめとする現実の社会的諸関係に由来する要素にも大きく依拠していたほか、さらに日本と世界の相互連関性を重視するものであった。換言するならば日蓮の世界認識の方法とは、「規範としての宗教」、「現世の内在化」、「世界という視座」ともいうべき三つの要素によって複合的に構成されていたということになる。

なかんずく日蓮が一閻浮提世界観とも称するべき認識の広がりによって、中世日本の三国世界観の限定的な認識の枠組みを乗りこえて、中世日本人の思考の射程を拡張したことは記憶に留められてよいであろうし、日本人が一三世紀において果たした達成の一つといってよいと思われる。

また日蓮の海外宣布の構想についていえば、本邦成立の諸宗諸教はもとより、今日において世界宗教と呼ばれる諸宗教すら必ずしもその創唱の当初から世界への宣布を構想していたわけではなかったことを考えるならば、その在世当時から自説の世界的展開を展望していたことを示す日蓮の海外宣布の概念は、一三世紀の日本のみならず、世界の宗教史における日本仏教の達成とも位置づけられよう。

Abstract

The School of Graduate Studies,
The Open University of Japan

Masahiro TANJI

Nichiren's method of recognizing the world

The purpose of this dissertation which consists of six chapters and two addendums is to demonstrate the Nichiren's method of recognizing the world, who lived in the Kamakura period and is one of the most famous and influential Buddhist priests even today.

The reason why Nichiren has long been popular is because he has been considered to be an extremely enthusiastic priest having very firm religious faith, not having objective way of thinking. However, he can be thought to be by far more detached person also through his own handwritten records and documents.

From this perspective the first chapter describes what occurred to Nichiren after the political persecution imposed on him that he was about to be beheaded in 1271. That persecution has been said to be the most critical event in his whole life. Therefore, it has long been analyzed and studied enthusiastically by the Nichiren sects for centuries and these researches have tended to favor what happened to Nichiren spiritually and subjectively, mainly focusing on his metaphysical changes such as his transformation from a human being into a kind of super being.

Nevertheless, what is important now is to learn more about the changes in his way of thinking compared to his life before the persecution. For instance, in those days, Japanese including Nichiren widely accepted a unique world outlook which was strongly rooted on Japanese Buddhism's concept known as *Sangoku-Sekaikan*, meaning that this world consists of just three countries, namely, India, China and Japan. It also means that Japan is the

indispensable part of the globe spiritually.

However, during the Kamakura period Japanese had already extended their geographical perception further because of the revolutionary development in trade, traffic and distribution domestically and internationally. This kind of awareness has made the way of thinking among Japanese to become more objective and realistic.

That is why Nichiren's handwritten records and documents, in particular the words and phrases which he used frequently also show that there were many changes which were physical and objective, not metaphysical and subjective. Then these characteristics of Nichiren can be found after the political persecution he experienced.

As a result of the changes the persecution made, he established the new world view which was quite different from *Sangoku-Sekaikan,* the old one. According to the new outlook, this real world is made of many countries and regions aside from the said three countries and Japan is just a small part of the globe. Therefore, the new world view, Nichiren established, would be called *Ichienbudai-Sekaikan* which came from a Buddhist's term, meaning "The World."

In the addendum of the first chapter, it is proven that the term *Itten-Sikai* meaning "The World", which has been considered as the representative word of Nichiren's teachings for centuries is not the word that he actually used by himself.

Although this term has been popular even today, it appeared unnaturally after Nichiren's death and replaced the term *Ichienbuda*i at a certain time. There might be some reasons among Nichiren's disciples who did not want to resist the political power unlike their mentor. That is because although both terms have a similar meanings *Itten-Sikai* seemed like more unagitated than *Ichienbudai.*

The second chapter focuses on the problem between Nichiren's plan for gaining political-legitimacy and his plan for religious-orthodoxy. As for this problem it has been considered that Nichiren was attached to the latter, however based on his remarks there were not only the latter but the strong willingness to seek the political-power through obtaining the majority in society. And to get the both, he thought to spread his doctrine not just in Japan but over Korean peninsula, China and the rest of the world as well. After Nichiren achieved his new world outlook he actually planned to gain the political-legitimacy and religious-orthodoxy in Japan via spreading his doctrine over the world.

The third chapter copes with Nichiren's relativization of Japan's political power after his persecution. As for this theme, it has been explained by *Shakuson-Goryokan*, meaning this world is originally owned and controlled by Shakyamuni-Buddha. However, this conception is based on the religious meanings, and there should have been the different perspective which is related to more realistic thought and knowledge such as geography, foreign relationship and so on because Nichiren lived in the period having a lot of development in these fields. When it takes the epochal consequence into consideration, it is obvious that as Nichiren got shifted his way of thinking from religious to more realistic, he extended his limited geographic knowledge based on *Sangoku-Sekaikan* to the more broaden world including so called the central, south, and south-eastern Asia regions in these days. As a result of that he used the new geographic term *Getsushi*, instead of *Tenjiku* which traditionally means India. Aside from these changes, Nichiren reevaluated Korean peninsula as the country which Japan should have appreciated more due to the fact that Buddhism was introduced to Japan from Korea.

The forth chapter features the issue of Nichiren's awareness of foreign countries, because this theme has been unclear in the history of research about him due to a kind of confusion in interpretations about his records and documents. Actually, some studies have said that Nichiren should have aimed to invade foreign countries not only by his doctrine but military forces as well while some have said did not. Then as a result of the careful analysis about his own handwritten documents, it was proven that his real aim was just to spread his doctrine out in foreign countries not to conquer them via militaristic invasion unlike some of his worshippers believed so before the end of the second World War.

In addition to it, Nichiren addressed his unique doctrine in his documents that Japan's Buddhism based on his own creed should get abroad via Korean peninsula, China and India in the future, instead of the general Buddhism coming to Japan from these regions.

The fifth chapter focuses on the relation between Nichiren and the Japanese collections of stories having a lot of Buddhism myths. It has been long said that the reason why Nichiren often made use of them was just because of encouragements and preaching to his worshippers. Nevertheless, collections of stories were not just the sources of such kinds of things but the essential elements in his own unique doctrines also, for example he withdraws the term *Ichienbudai* not from Buddhist sutras but from one of

Japan's collections of stories titled *Hobutsushu*. As this fact shows, Nichiren learned a lot of things from many collections of stories and internalized the essentials of them aside from Buddhist sutras.

The addendum of the fifth chapter proves that the same thing as the fifth chapter shows can be found in the document which Nippo who is one of Nichiren's disciples wrote, recording the contents of his mentor's direct lecture.

The sixth chapter features that even the record of Nichiren's miracle which was written by Nichiren himself, its essential part came from *The Tale of the Heike* which is one of the most popular historical war chronicles having the wide variety of versions. Namely, just when Nichiren was about to be beheaded in 1271 as the first chapter mentions, some kind of lightning appeared over the sky above the execution site suddenly and Nichiren managed to survive. About this miracle he wrote what happened to him on letters to his worshippers later. However, a similar kind of story related to some kind of lightning can be found in one of the versions of *The Tale of the Heike*.

This shows that Nichiren would like to express his miracle, regardless whether such kind of phenomenon like miracle really occurred or not, he might have picked out the big clue from *The Tale of the Heike* when he wanted to express about his experience. Eventually, this thing indicates how Nichiren heavily relied on Japanese stories and chronicles as well as Buddhist sutras.

As stated above, Nichiren's method of recognizing the world consisted of three pillars, namely religion-based elements, real society-based elements and the viewpoint from the deeply linked relation between Japan and the world, not just religion-based factors unlike it has been claimed for many centuries. Especially his viewpoint overcoming the recognition based on *Sangoku-Sekaikan* which was widely accepted during the Kamakura period, is a quite unique way of thinking in Japan in those days. It means that Nichiren's thought really broke new grounds in consideration among Japanese Medieval Time and this kind of way of thinking can hardly be found not only in Japan's history but in the world's history as well. It would also be able to be considered as an unprecedented discovery of Japanese in the 13th century.

博士論文審査及び試験の結果の要旨

学位申請者
　放送大学大学院文化科学研究科
　文化科学専攻人文学プログラム
　氏名　丹治　正弘

論文題目
　日蓮の世界認識の方法

審査委員氏名

・主査（放送大学教授　　博士（文学））　近藤　成一

・副査（放送大学教授　　博士（文学））　魚住　孝至

・副査（放送大学教授　　修士（法学））　原　　武史

・副査（東京大学大学院教授　博士（文学））　蓑輪　顕量

論文審査及び試験の結果
　本論文は、日蓮の思想を、世界観、正統意識、体制相対化、対外意識、文化的受容などの観点から論じたものである。

論文の構成と概要
　論は、以下のように、６章と２つの補論から構成されている。
序章　　日蓮研究史と問題の所在
第１章　日蓮の世界観の転換―三国世界観を乗りこえて―
第１章・補論　日蓮「一天四海」の用法と変容
第２章　日蓮の正統意識について
第３章　一閻浮提・月氏・半島―日蓮の体制相対化をめぐって―
第４章　日蓮の対外意識と仏教西還説
第５章　日蓮と『宝物集』

第５章・補論　日法『聖人之御法門聴聞分集』に見る後白河院説話について
第６章　日蓮の龍口霊験譚について
終章　　日蓮の達成

序章では、日蓮についての研究史を日本史学・日本思想史学研究と教義・教団史研究に大別して検討し、前者においては、「国家と宗教」をめぐる論点として、仏法為本論、王仏冥合（法国冥合）論、国王・国主観、体制観、神祇観、世界観、対外観、著作の真偽問題などが、後者においては、著作の真偽問題、天台本覚思想の影響の有無、布教手段をめぐる摂折論、軍記・説話・類書等の受容の問題などが論じられてきたことを指摘する。そのうえで、日蓮の世界観、対外意識、体制相対化、文化的受容などについて、従来必ずしも明らかにされてこなかったテーマを考察し、日蓮研究のさらなる可能性を探ることを本論の課題とする。

第１章では、文永 8 年(1271)の佐渡流刑を画期として日蓮の世界観が転換したことを論じる。佐渡流罪以前（佐前）の日蓮は他の宗教者と同様に、この世界はインド・中国・日本の三国で構成されるとする三国世界観を受容していたが、佐渡流罪以後（佐後）には全世界を意味する「一閻浮提」という語を「三国」の語に置き換えて多用するようになることをまず示す。その上で、「一閻浮提」世界観が「三国」世界観よりも広義の地理的・空間的認識を示すとともに、構造的にも上位に位置づけて三層にわたる認識構造であることを論じる。そして日蓮が「三国」世界観を超克して「一閻浮提」世界観に達したのは、13 世紀における対外的交流や蒙古襲来の危機に伴う地理的関心と知見の拡大、日本国内における交通の発達、国土の数量的把握などの現実的な諸要件によるものとする。

第１章補論では、「一閻浮提」とほぼ同義に理解され、今日ではより一般的に使用されている「一天四海」について検討し、この通りの語は日蓮の著作には見出されないこと、「一天」ないしは「四海」を単独で用いた例はあるものの、いずれも日本一国を意味しており、「一閻浮提」のように世界を意味するものではなかったことを論じる。そして「一閻浮提」のかわりに「一天四海」が使われはじめる時期を特定するのには史料的制約のあるものの、「一天四海皆帰妙法」という成語が一般化された時期は近世中期にかけてであったと推定する。

第２章では、日蓮の正統意識の特徴を、社会への強い承認要求を有したことに見出し、社会的次元における正統性を調達するのに日蓮の対外認識がどのように作用したかを検討する。社会的次元における正統性調達の源泉の一つは体制の介在による自説の公的採用であったが、それが挫折して新たな社会化への方途を探るなかで、自説の証明されるべき地域として佐前には日本一国を想定していたのに対して、佐後には日本以外の地域をも展望するようになり、「一閻浮提地域と自身を結びつけることによって、自身と自説を日本よりも高次の存在として位置づけ、その高みから日本における正統性の獲得と社会化を目指した」。日蓮は「三災七難」という概念に注目することにより自説の正しさを証明する客観的方法に到達したが、さまざまな災難のなかでも他国侵逼という対外関係の変動に注目したのは、同時代に共有されていた危機意識、国際情勢などの客観的

要件が存在したことによる。日蓮は外寇の可能性を述べるにあたって善神捨国説を展開したが、やがて仏典には明確な根拠を持たない隣国聖人説に変化したのは、外寇が現実味を帯びてしまったために、論理の補完を余儀なくされたことによる。またこの変化とともに日本神祇の属性も変化し、本来ローカルな存在であったのが梵天・帝釈天などと同様の普遍的存在に変貌していった。日蓮は文永5年(1268)の蒙古来牒以降、外寇の危機を自説の正統性調達の源泉としてきたが、弘安の役(1281)で蒙古が撤退した後、日蓮が沈黙を守ったのは、「自身が予言した天譴が下されなかったことで正統性獲得の源泉を喪失したため」であるという。

第3章では、佐前の日蓮が当時の宗教者一般と同じく王法仏法相依の立場をとっていたのに対して、佐後は仏法為本に転じ、仏法を王法の上位に置くことで体制を相対化し、王法の権威を否定するに至った問題を取り上げる。日蓮の体制相対化の背景として、従来は釈尊御領観という宗教的次元の認識が指摘されてきたが、それに加えて「物理的な現実に即した地理的・空間的認識という現実的次元の認識」を指摘し、二つの認識が体制相対化という概念を重層的に構成していたという。そして「物理的な現実に即した地理的・空間的認識」としては、「日本を、日本以外の地域と物理的に比較・対照することで、日本の狭小さを強調」し、日本を相対化したこと、インドを意味する「天竺」に替えてアジア全域を意味する「月氏」を用いるようになったこと、三国世界観から捨象されてきた韓・朝鮮半島を再認識し、半島を仏教伝来の歴史において日本の上位に位置づけることで、日本の相対化をはかったことなどを指摘する。

第4章では、日蓮の対外意識を示すものとして「仏教西還説」を取り上げる。佐前の日蓮が当時一般的であった「仏教東漸説」を受容しているのに対して、佐後は「仏教西還説」に転換したこと、西還説は東漸説の裏返しの表現であるけれども、文証たるべき原典を改変し論拠を自分で作出したものであること、日蓮の対外意識は自説の海外宣布を第一義とするものであったことなどを論じる。

第5章では、日蓮の著作と『宝物集』の関連箇所を検討し、日蓮にとって軍記・説話が思想的営為を支える重要なリソースであったことを論じる。特に佐後の重要なキーワードである「一閻浮提」を日蓮は仏典からではなく『宝物集』から得ていたことを指摘する。

第5章補論では、直弟による日蓮の講義録に見える後白河院説話を検討し、日蓮が密教批判や十善帝王説といった教義的側面とは別の側面から帝王に関する説話を取り上げていると論じる。

第6章では、文永 8 年の法難に関わって日蓮の記す龍口霊験譚が長門本『平家物語』が載せる平盛久の観音利生譚と酷似することに注目し、日蓮が『平家物語』諸本成立の前段階に位置する説話群を受容していたこと、日蓮は自らの体験を再構成するのに同時代の説話に範を取っていたと想定されることを論じる。

終章では、如上の論を日蓮の世界認識の方法として総括し、日蓮の方法が、規範としての宗教に由来する要素、現実の社会的諸関係に由来する要素、日本一国を超えた高次・広域の概念に目を向ける視座の3つから複合的に構成されてい

ること、この３つの要素の発現順序にそって日蓮の営為を概観すると、「まず宗教に立脚し、現実社会に学び、やがて世界を展望した」と総括しうること、日蓮にとって宗教とは、世界認識の出発点であって、そこで完結するものではなかったこと、日蓮の思想的営為の一結論は「宗教だけではこの世界を正確に認識するには足りない」ということであり、「日蓮の主張は世俗の体制・権力の相対化にとどまらず、最終的には宗教すらも相対化していた」と論じる。

論文の評価

本論文は「日蓮の世界認識の方法」と題して、６章と２つの補論から構成されている。日蓮に関する先行研究を渉猟し、研究史をよく纏めた上で立論されている。典拠となる文献の史料批判に厳密であり、特に日蓮遺文の特質である真跡、曾存、偽書などの区分に十分注意が払われている。また、日蓮自身の著作のみならず周辺の資料への配慮があり、広い範囲の資料から考察して結論を導かれている。論じ方も緻密であり、論旨も極めて明快である。

研究史については、戦後の研究を「史学・思想史学」と「教義・教団史」とに分けて概観した後、後者において日蓮の思想が宗教的次元においてのみ検討されているのは不十分であり、社会的次元における検討が必要であるとして、日蓮の対外観や地理的認識などを前者の方法によって研究すべきことを課題として提示する。著者が「史学・思想史学」の方法を用いて、日蓮が社会的次元において正統性を調達した源泉を探究し、日蓮の世界認識の方法が「規範としての宗教」、「現世の内在化」、「世界という視座」という３つの要素によって複合的に構成されていたという結論を導き出したのは大きな成果である。しかし本論文は３つの要素のうち後の２つを明らかにしているが、最初の「規範としての宗教」についての論述は必ずしも十分ではない。従来の「教義・教団史」により論じられ尽くされてきた問題であるということもあろうが、著者が「史学・思想史学」の立場から進めてきた考察から翻って「教義・教団史」からの研究を咀嚼し、「教義・教団史」の内在的研究課題に応えていくことも、著者の今後の課題になると思われる。

本論文は日蓮の世界観が転換する画期を佐渡流罪に求め、「佐前」「佐後」という従来から用いられてきた時期区分を採用している。しかし日蓮の世界観の変化が「佐前」「佐後」という時期区分のみでとらえられるかどうかについては疑問もある。たとえば、「正嘉の大地震」などから日蓮が現世への認識を深めていった面もあるのではないか。日蓮の思想展開の時期区分に諸説があることは、第１章注１で触れられており、その上で文永８年(1271)10 月の佐渡到着以降を「佐後」とする立場を取ることが表明されている。立場を単純にしたほうが論旨は明確になるが、立場を単純にすることによってこぼれおちてしまう問題があることを見逃さず、今後さらに研究を深める端緒としていただきたい。

本論文は日蓮の空間認識について大きく論じているが、空間的な把握とともに時間観念にも目配りをしてほしかった。日蓮論として重要と思われる「末法」の時代認識について、ほとんど論じられていない。また当時には中国思想に起源

のある「末代」の考えもあるので、そちらにも言及がほしかった。

第２章で「隣国聖人説」について、『法門可被申様之事』の「天照大神等、隣国の聖人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるるか」という文章を引用して、「善神が隣国の聖人に身を変えて、あるいは身に乗り移って、悪法の充満する国を懲罰するという主張」と解釈しているが、原文と解釈との間に差異があり、原文の意味するところは「善神が、隣国の聖人に命じて、「謗法」つまり『法華経』を謗るようになっているのを矯正しようとする」ということであると思われる。『聖人知三世事』には「彼蒙古国の大王に入らせ給ひて責め給ふ」、『三三蔵祈雨事』には「りんごくの賢王の身に入りかわりて、その国をほろぼすべし」と述べられていることは紹介されているが、個々の引用の解釈は原典に即して正確に行った上で、全体の文脈からどのように解釈されるかを示すべきかと思われる。また、蒙古襲来に関しては、『小蒙古御書』についても、吟味が必要な文献ではあるが、注で著者の立場から論評したほうがよいかと思われる。

日蓮は「日本が日蓮の教法に帰一して再生を遂げるためには、亡国はやむを得ないとの認識も有した」と著者は理解しているが、日蓮は、日本が「謗法」＝『法華経』を謗る状況になっていることを改めるための「天譴」を言うのであって、日本が蒙古によって滅ぼされることまで予想していたとは言えないと思われる。日蓮が弘安合戦の危機の迫った弘安 3 年(1280)12 月に書いた「諫暁八幡抄」についても検討すべきであろう。日蓮が臨終の時に掛けていた「大曼荼羅」にも「天照大神」「八幡大菩薩」を書き込まれていることからも、天照・八幡に日本が守られているという意識が強かったのではないかとも思われる。

また弘安合戦でモンゴルが撤退した後、日蓮が沈黙を守った理由について、著者は「自身の確言した天譴が下されなかったことで正統性の源泉を喪失した」と述べているが、モンゴル襲来の危機が去ったわけではない当時の状況では、「天譴が下されなかった」と断定することは出来ず、「正統性が喪失した」とまでは言えないのではないかと思われる。

第４章では自説の海外宣布を第一義とする対外意識にもとづく日蓮の思想的営為として「仏教西還説」が取り上げられるが、日蓮が海外宣布まで言うのは、『法華経』自体に末法ではこの経の真実を言っても「有諸無智人悪口罵詈」等、「加刀状瓦石」等などで迫害を受けることが予言されており、自身の「龍口の法難」はまさにそれを証するものだという宗教的確信から、「日蓮なくば誰か法華経の行者として仏語をたすけん」(『開目抄』) とまで言う意識に基づくと思われる。したがって、「自説」というよりも、『法華経』の真実を海外宣布しようとするものであったのではないか。

また「仏教西還説」についてはさらに考えるべき論点が残されていると思われる。ひとつは第２章で取り上げられている「隣国聖人説」との関係である。「悪法のゆえに国を捨て去った善神が隣国の聖人に身を変えて、あるいは身に乗り移って、悪法の充満する国を懲罰する」のであれば、仏教が西還するまでもないようにも思われる。人の言説に矛盾があるのは常であるが、思想家・宗教者の言説を理解するために、言説相互間の無矛盾性を究極まで追及することが必要で

はないか。あらためて「教義・教団史」の方法に学ぶ余地も残されているように思われる。また、求法のため、巡礼のために大陸にわたった律宗や禅宗の僧侶は多く存在するが、自ら掴んだ仏法思想が西へ還るべきだという視点は日蓮独自のものであり、ここへの着目は重要である。ただ、日蓮が何故そのように考えたのか、またそうはいえども自らは行こうとしなかったのは何故なのかなど、もう少し深く追求しても良かったと思われる。

「仏教西還説」は『法華経』の真実を日本国を越えて海外に伝えていくという使命感から言われたものであったと思われるが、それは日蓮の、当時としては客観的なアジア認識を強調する立論と矛盾するようにも見える。この点についてのより踏み込んだ分析も求められる。著者は歴史上の日蓮と近代の日蓮主義との間に大きな懸隔を認めているが、両者の連続面にも注意すべきである。著者は「一閻浮提」を日蓮の思想を読み解くキーワードとしているが、そうであるなら近代の日蓮主義に大きな影響を与えた『撰時抄』の「前代未聞の大闘諍一閻浮提に起るべし」についても、もう少し言及すべきではないか。

日蓮の言説が軍記・説話を重要なリソースとしたことは、日蓮の言説が文化的成果を受容したものであること、日蓮の思想的営為の社会的次元における側面を示すものと位置付けられているように思われるが、取り上げられている言説について別の解釈がありうることについてさらに注意を払う必要があると思われる。著者は龍口の霊験を日蓮が自らの体験を平家説話に範をとって再構成したとするが、単に平家説話に範をとったというだけではなく、霊験とされる現象は悪天候のなかでの球電現象であったと理解する説もある。一つの立場だけで解釈するのではなく、さまざまな立場からの解釈に意を払うことで、さらに認識を深めることが可能になると思われる。

以上、本論文は、先行研究の渉猟・咀嚼・整理においても、それにもとづく問題設定においても、史料の批判と解釈においても、論旨の構成においても、高い水準を達成しており、今後の研究に対する貢献も大きいと判断される。したがって、本審査委員会は、全員一致で、博士の学位を授与するのに値すると判断した。